

*But*の「対照」の意味とその動機付け：dialoguality (対話形式)と dialogicity (二者の視点)からの一考察

小 野 寺 典 子

1. はじめに

英語の連結詞 (connective) *and* と *but* が真理関数的¹⁾に同等である (truth-functionally equivalent) ことは広く認められてきた (Levinson 1983: 127, Traugott 1986: 146-147, Schiffrin 1987: 185, 寺澤編 2002: 687-688)。 *And* と *but* の意味のちがいは、*but* を含む文 (発話) に対照の意味 (contrastive meaning) が生じることにあるようだ。この *but* に対照の意味があることも広く認められてきた (Schiffrin 1987: 185)。しかし、その意味が意味論的意味と言ってよいのか、また語用論的意味なのか、まだ論議は続いている。

But の対照の意味については、語用論から Schiffrin (1987), van Dijk (1979), R. Lakoff (1971), Blakemore (1987) らが、また意味論の立場から Kempson (1975) などが説明を試みてきた。しかし、*but* の対照の意味の起源や、もし意味の発生が最初は語用論的推論 (pragmatic inference) として起こるのであれば、²⁾ そうした「対照」という推論がどこから起

1) 本稿において、英語の用語の和訳は主に『学術用語集言語学編』(1997年日本学術振興会)によった。

2) Traugott (1989), Brinton (1996) らが行ういわゆる歴史的意味変遷の研究においては、言語形式の新しい意味の最初は、話し手 (書き手) の含意 (implicature) そして聞き手 (読み手) の推論 (inference) として現れると考えられる。そうした含意が次第に広まることは「含意の慣習化¹³⁾」 (conventionalization of implicature) と呼ばれ、文法化が起こる際の意味変化の特徴 (Hopper and Traugott 1993: 75, Brinton *ibid.*: 56) とも言える。

こってくるのかについては議論がなされてきたとは言い難い。本論文では、四半世紀前から議論され (e.g. Roulet 1984)、最近では Traugott (2007) や Schwenter (2000) でも提唱された dialoguality (対話形式) と dialogicity (二者の視点) という考え方から、そもそも *but* の対照の意味が発生した動機付けや背景も含めて考察してみたい。Dialoguality とは、話者の数を問題にしており、「二人の話者による話。対話形式」ということである。また dialogicity は、話の視点の数を問題としており、「二者の視点」ということである。発話がどのような環境 (一人語りなのか、二人による対話なのか) でなされ、そこで言われることには、複数の見方 (視点) が関わっているのかどうかを問題とする考え方である (詳しくは 4. 参照)。

本稿では、まず *and* と *but* の意味が同じか違うかを論じ (2.)、違いが *but* の対照の意味にあるなら、その意味が語用論・意味論でどのように説明されるのかを概観する (3.)。その上で、会話運営のあり方も含む dialoguality と dialogicity が *but* の対照の意味の発生を動機付けていたかもしれないということを考察する (4.)。

2. 意味論的には意味が同じ *and* と *but*

意味論が真理条件的意味 (truth-conditional meaning) だけを考察の範囲とするなら、*and* と *but* は同じ真理条件的 (真理関数的) 機能を持つ (Levinson 1983: 127, Traugott 1986: 146-147, Schiffrin 1987: 185, 寺澤編 2002: 687-688)。二者は接続性において真理関数的の同等であり、それは論理的に「相称」(symmetric) の & に近い (Traugott *ibid.*: 147)。

(1) a. He went to the store *and* the store was closed.

b. He went to the store *but* the store was closed.

意味論的には上記のように同じとみなされる *and* と *but* だが、実際のコ

コミュニケーションにおいて (1) a と (1) b にはちがう解釈が成り立つ。(1) b では、2つの等位項 (conjunct) において表された命題の間に明らかな対照関係 (contrast) が認められる。しかし、この「対照」の意味、つまり (1) a, b 間に見られる意味のちがい (すなわち *and* (1a) と *but* (1b) の意味のちがい) は、真理条件的意味論 (truth-conditional semantics) では説明できない。*And* と *but* は真理条件的に等しくなってしまうからである。

3. *But* の対照の意味：意味論と語用論からの説明

こうした *and* と *but* の意味のちがいである「*but* の対照の意味」はどのように説明されてきたのか。*And, but, or* といった論理的連結詞は長く意味論の範疇で議論されてきたが、そんな中で、早い段階でより語用論的アプローチを行ったのは R. Lakoff (1971) である。ここでは、*but* の対照の意味について語用論範疇から説明を試みた Schifffrin (1987), van Dijk (1979), Lakoff (1971), 意味論者として考察した Kempson (1975) の考え方を紹介し、さまざまな議論がなされてきたことを振り返る。

まず Schifffrin (1987: 185-186) は、*but* の対照の意味を理解するのに必要なのは、私たちが普通持っている「通常の出来事の推移」についての予想 (expectations of a normal course of events)、または「背景知識」 (background knowledge) だという。

(2) I went to the store *but* the store was closed.

(3) Liz did not get the job *but* she is happy.

(2) の二つの等位項が対照をなすのは、私たちに「通常の出来事の推移」—すなわち「店が開いていることを知らなければ (または予想していなければ)、店には行かない」という予想があるからである。また (3) で伝えられる対照を理解するには、背景知識「人は仕事に就きたいと思

っており、もし就けなければ不幸である」が必要である。さらに (4) を理解するには、異なる背景知識が必要である。

(4) Liz got the job *but* she is happy.

ここでは Liz が幸せである事実が一般的予想に反していると（私たちは）考えるだろう。(4) を理解するには背景知識として、「Liz が仕事に就きたくなかった」ことを知らなければならない。このように、(3) (4) の場合の二つの等位項の間の対照は同様であるが、異なるのは対照を説明する背景知識である。

Van Dijk (1979) は、連結詞 (connectives) を意味論的・語用論的連結詞に分けて説明した。意味論的連結詞は、述べられた事実・命題間の関係を表し、語用論的連結詞は発話行為 (speech acts) の間の関係を表すとした。語用論的連結詞 *but* を仮に 2 タイプに分類する。(5) (6) がそれぞれの例文である。

(5) Harry was ill, *but* he came to the meeting anyway.

(6) A: Let's go!

B: *But*, I am not ready yet!

第一の語用論的 *but* の用法 ((5) のような) は、予想の否定の *but* である。前述の Schiffrin (1987) による「通常の出来事の推移」の予想 (expectations of a normal course of events) (例文 (2) の場合) の否定、そして後述する Lakoff (1971) による「予想の否定の *but*」とほぼ同じものと言える。すなわち、(5) の解釈は、通常病気の人は会議に来られないという予想が立つが、*but* はその予想を否定している。

Van Dijk (1979) によるもう一つの語用論的 *but* の用法は、発話行為間の関係を結ぶ。(6) では、A, B による発話行為「要求 (request)」ー

「非受諾 (non-acceptance) (「主張」とも言える)」が見られる。(6) で、話者 B は A による発話行為を受諾できないことを表している。また、A の発話行為の必要条件 (prerequisite condition) 「(A による) 命令で示された行為ができる状態にあること」が満たされていないことを主張している、とも言える。(6) では、*But* によって示される「対照」の意味は、命題にあるのではなく、行為 (actions) に関係しているのである。行為と行為を結ぶ *but* であり、相互作用的・語用論的意味を結ぶ連結詞である。

R. Lakoff (1971) は、また、真理関数的には *and* と同等であると分析される *but* の対照の意味を次のように説明する。Lakoff は *but* の用法を 2 つに区分した： (a) 意味論的対立の *but* と (b) 予想の否定の *but* である。(7) (8) がそれぞれの例文である。

(7) John is tall *but* Bill is short.

(8) John is tall *but* he's no good at basketball.

(7) 「意味論的対立の *but*」において対照の意味は、2 つの等位項の語彙項目の中にはっきりとある。(7) において、語彙項目 tall-short が反意語の対をなしている。言語の指示機能 (referential function) レベルで見られる対照である。

(8) 「予想の否定の *but*」においては、(7) のような意味論的対立なしに *but* が用いられている。しかし 2 つの等位項の間には、含意された何らかの矛盾がある。Lakoff は、こうした含意された対照の意味を解釈するために、聞き手は「前提」(presupposition) を持たなければならないとする。ここで前提されていることは「背が高ければ、バスケットボールがうまいと予想される」(Lakoff *ibid.*:133) ということである。こうした (8) のような例が「予想の否定の *but*」である。(Blakemore 1987 も、Lakoff と同様に 2 つに区分した *but* について述べている。)

真理条件的意味論の立場を取る Kempson (1975) は、*but* の解釈は、話し手・聞き手の予想（または語用論的知識）によるため、意味論範疇では *but* の対照の意味の前提条件 (prerequisite) を規定できず、説明がつかないとしている (Schiffrin 1987: 186-187)。その上で Kempson は、*but* の対照の意味の説明として、Grice (1975) の「『言語規約的含意 (conventional implicature)』の結果である」という提案を取り入れている。「言語規約的含意」(Grice 1975) とは、同じく Grice が提唱した「会話の含意」(会話の公理を遵守することから生まれる含意) (conversational implicature) とは全く異質の非真理条件的推論 (non-truth-conditional inference) である。それは、「特定の語彙項目や表現に、慣例 (convention) として備わっている含意」のことである。Grice はその例として 2 例のみを挙げたが、その 1 例が *but* である。すなわち、「*but* は、*and* と同じ真理条件的 (真理関数的) 内容を持つが、[*but* が結ぶ] 2 等位項間に何らかの『対照』を導くという言語規約的含意を付加的に持つ」と言う (Levinson 1983: 127)。

Kempson の言語規約的含意説は、言語規約的含意を確かめる二つのテストによって支持される。一つ目は、*but* の対照の意味は「分離可能」(detachable) というテストだ。上述の (1) a, b では、この二通りの言い方が真理関数的には同じであることを見た。*But* と真理関数的に同じである *and* (1a) からは対照の意味が起らないことから、*but* の対照の意味が真理関数的意味から「分離可能」であることが証明された。二つ目のテストは、言語規約的含意の「取り消し不可能性」(non-cancellability) である。(9) で見るように、*but* の対照の意味は後から取り消すことが不可能である。

- (9) Although Mary is poor *but* happy, there is no contrast between these two states.

(9) は矛盾し、成立しない。よって、*but* が導く対照の意味は取り消し不可能である。二つのテストから、*but* の対照の意味が言語規約的含意であることが証明された。

Kempson のこのような考察から、意味論の範疇では *but* と *and* の意味が等しいものと見なされ、*but* の対照の意味が語用論的意味と見なされることはよくわかった。また上記の数名の考察から、*but* の対照の意味が、語用論範疇の「背景知識」、話し手・聞き手の「予想」、「前提」、「発話行為」、「含意」といった概念からよく説明されるものであることもわかった。しかし、その対照の意味がそもそもどのように動機付けられ生まれたのか、あるいは意味の起源がどこにあるのかという問題を考えようとする、答えのヒントが見つかったとは言えそうもない。

次の4.では、*and* と *but* の意味の比較・考察に有用な「視点の数」とともに、ことばがどのようなコンテキストで使われるかといった面まで含めて議論する「話者の数」の考え方 (Traugott 2007 等) から、*and* と *but* の意味を考えてみたい。

4. Dialoguality (対話形式) と dialogicity (二者の視点) : 話者の数と視点の数

4.1. 視 点

4.2. で dialogicity を用いて *but* の意味を考察する前に、視点 (viewpoint) とはそもそもどのようなものなのか概観しておきたい。「視点」という概念はこれまでに、様々な研究者が微妙に異なる意味で用いてきた。言語研究の広範なトピックの中でも、移動動詞 (come, go) や日本語の授給動詞 (くれる・あげる他) 等の分析において「ダイクティックな描写」(澤田 1993 : 304) をする際に用いられ、また再帰代名詞・代名詞やボライトネス表現・敬語の分析に至るまで「視点」という概念は微妙に異なる意味で用いられている (澤田 1995 参照)。

Dialogicity は上のような言語研究における「視点」とはまたやや異な

る意味で用いられているようで、これは文学作品分析で用いられる「視点」に近いようである。³⁾ここでは「小説への言語学的アプローチ」と副題のついた『小説の文体』（筧 監修 2003; 原著 *Style in Fiction*, Leech and Short 1981）から dialogicity（二者の視点; Traugott 2007）のもととなった「視点」という概念について概観を試みる。

筧 監修（2003:198）では、小説の作者と読者の間のやりとりについて以下のような記述がある：

小説作品を、作者と読者の間で交わされる談話として検討してきた [...] 文体的選択におけるほかのすべてのレベルも、[...] つまり小説における読者との関わり方について、作者がなす選択を前提としている。これに関してここで直接考察してきたのは、視点・距離・調子の文体的価値である。これらは、[...] 作者が、小説によって何が言いたいのか（つまり何を読者にわからせたいのか）という問題に関わる。そして、作者と読者の間に取り引きがあるものと想定されるため、この問題は「作者が何を言おうとしているのかが、読者にわかるか」という問題と、実際上区別がつかなくなる。

この引用は、小説という書きことばを「作者と読者の間で交わされる談話」と位置付けている。ここで「談話」（discourse）が、小説等を含む「書きことば」も、自然発話の「話しことば」も含む（cf. Stubbs 1983: 1）ことを考えれば、主に 1970 年代から 80 年代以降に発展した話しことば分析により解明されてきたいくつかの語用論的思考方を援用し、小説という書きことばを分析できることを暗示している。つまり上の引用には、

3) Traugott p.c.: Traugott (2007) で dialogicity, dialoguality が紹介されたが、Traugott もこれまで「視点」が様々なニュアンスで用いられてきたことを認め、Leech and Short (1981) にあるような文学分析における「視点」に近いとしている。

いわゆる話しことば研究で議論されてきた「話し手の意図や、話し手の戦術的な (strategic) ことばの用法が聞き手にうまく伝わるか」また「話し手の含意が聞き手に正しく推論されるか」という問題と同様のものが含まれている。

ここで上の段落の内容と「主体性・主観性 (subjectivity)」との関連が浮上してくる。Traugott (2003 他) による一連の「主観性」についての考察のもととなる Benveniste, Lyons の表現を借りれば、前の段落の「話し手」は “sujet d’énonciation (speaking subject)” (Benveniste 1971[1958]: 225), “locutionary agent” (Lyons 1982: 102) となり、上の引用中の問題点は「主体」の問題または主体性・主観性の問題と置き換えられると言えよう。主体性・主観性 (subjectivity) とは Lyons (1982) によれば次のようなものである。

the term subjectivity refers to the way in which natural languages, in their structure and their normal manner of operation, provide for the locutionary agent’s expression of himself and his own attitudes and beliefs (102).

(主観性という用語は、自然言語がその構造において、また通常の使用において、発語行為者の自身の表現また自身の態度・信条を表現する方法を指す。) ⁴⁾

また Traugott (2003: 126) による「主観化」の概念の定義の中に「主観性」とは何かを読み取ることができる：

subjectification is the mechanism whereby meanings become over time to *encode or externalize the SP[eaker]/W[riter]’s perspectives*

4) 和訳は筆者による。

and attitudes as constrained by the communicative world of the speech event, rather than by the so-called ‘real-world’ characteristics of the event or situation referred to. (イタリック体は筆者による。)

Traugott (2003: 126) によれば、主観性とは、話者（作者）が「言語使用中」視点・態度を記号化・具体化することである。また「語られる内容・語られる方法に対して向けられた話者（作者）の主観的信条また態度」（Traugott *ibid.*: 125 より筆者が和訳）とも言える。

小説の分析における視点を整理してみたい。先の筈 監修 (2003: 185) で「登場人物の視点」は「その人物の思考・感情・経験」とある。視点は、思考・感情・経験を包括したものに基づくものである。小説に現れた会話文であれば、その想定される話者の、また地の文であれば、(含意された) 作者の視点が、会話や話しことばに見られる話者の視点と同様、あると言えよう。書かれた会話文は、いわば「話しことばの書いた記録」(Rissanen 1986) だが、そこには想定される話者の視点が働き、メッセージの送り主として受け手にどのように伝えたいか、何をわからせたいか、と主観的な判断・態度・姿勢が、使用される言語に語彙的・文法的 (Traugott 2003: 125) また語用論的に表われると考えられる。

4.2. Dialoguality (対話形式) と dialogicity (二者の視点)

会話 (コミュニケーション) がなされる時、話者は何人いて、視点 (見方) はいくつあるのか。話者の数・視点の数の分類は、特にヨーロッパでは四半世紀にわたってかなり議論されてきた (Traugott 2007)。最近では、Nølke (2006) が多数の視点 (polyphony) の考え方を詳しく紹介し、Schwenter (2000) がスペイン語の談話標識の多義性の分析に用い、Traugott (2007) によってこの考え方の概観が再確認された。認知言語学においては、「多数の視点」は *blending theory* (e.g. Fauconnier and Turner 2002) によって議論されている (Traugott *ibid.*)。

“Monologual” — “dialogual” は話者の数の問題である。簡潔に、一人の話者による話か二人による話か、ということだ。“Monologic” — “dialogic/polyphonic” は視点 (view points) の数の問題である。簡潔には、一人の視点か二人の視点かである。Traugott (2007) では、“monologic” — “dialogic” の区別は *and* と *but* の意味の分析に有効だが、「意味の起源・動機付け」を考えるには、視点の数とともに話者の数 (“monologual” — “dialogual”) を考慮に入れるべきだと提唱する。

話者・視点の数の分類をまとめると、表1のようになる。

表1 話者と視点の数 (Traugott 2007: 7, Schwenter 2000: 260 参照)

話者の数	視点の数	
1 (monologual)	1 (monologic)	2 (dialogic)
2 (dialogual)	1 (monologic)	2 (dialogic)

実際の例文を見てみよう (Traugott 2007 参照)。

(10) Mary is short *and* she’s a good volleyball player.
(monologual + monologic)

(11) A. Mary is short.
B. *And* she’s a good volleyball player. (dialogual + monologic)

(12) Mary is short *but* she’s a good volleyball player.
(monologual + dialogic)

(13) A. Mary is short.
B. *But* she’s a good volleyball player. (dialogual + dialogic)

(10) は、話者は一人で視点も一つである。「身長の低さ」と「バレーボールがうまいこと」の間の（一般常識的）矛盾は言語的にマークされていない。*And* の前後の節とも同じ結論を指向する。つまり (10) は Mary の二つの特徴の羅列である。(11) は A, B 二者による対話である。ここでも Mary の二つの特徴の間の矛盾はマークされず、A も B も同じ結論を目指している。ただ、もし B の発話頭の韻律（ストレスの置き方、イントネーション）が有標なものであれば、B は一般常識に照らして、Mary の場合の矛盾を表現していることになろう（cf. Traugott 2007: 7）。(12) は一人の話者による。2つの節の命題間の矛盾（身長は低い、バレーボールがうまい）が *but* によって言語的に明示的にマークされている。前節と後節の「対照」が明示的に示された。2つの節は違った結論を指向しており、Mary の場合についての驚きが伝えられる。(12) のような文（発話）の場合、視点は二つ（dialogic）と考える（Traugott *ibid.*）。最後に、(13) は A, B 間の対話である。話者が二人（dialogual）、視点が二つ（dialogic）の例である。(12) のような一人の話者による発話（一文）の場合同様、B の発する *But* により、A, B による発話内容で表された命題間の矛盾すなわち「対照」を言語的にはっきりと記号化している。

ここで、(10) (11) (12) (13) に見られる *and* と *but* についてまとめてみよう。Schwenter (1999, 2000) による「対照」(contrast) ・「逆接」(adversativity) の考え方を参照すると、二つの連結詞の性質がより明確となる。2. で、意味論的には *and* と *but* の意味は等しいとみなされることを述べた。ここで *and* と *but* の意味をもう一度語用論的に捉え直してみると、*and* が用いられた (10) (11) の場合でも対照の意味が生ずることがある。(10) (11) のように、二つの節または発話が *and* で結ばれている場合、言語的に接続詞によって対照が明示的に標されて（しるされて）はいないが、「身長とバレーボールのうまい・下手」の関係を知っている聞き手には、*and* の前節・後節（または A の発話・B の発話）の

間の対照が間接的に伝わる。Schwenter は「対照」「逆接」について次のように述べる：「対照」(contrast)は「厳密に言語学的概念ではなく、予想の構造に関係する一般的認知能力である」一方、「逆接」(adversativity)は「厳密に言語学的概念であり」(Schwenter 2000 : 259)、「言語使用の中で構築された異なる視点の間の対照」⁵⁾(Schwenter 1999 : 127)を問題とする。(10)(11)はandが用いられた例文だが、実際のコミュニケーションにおいてはandが相称を表し、一つの視点(monologic)で述べられる場合もあれば(Traugott 2007 より)、間接的に「対照」が伝わる場合、つまり二つの視点(dialogic)で述べられたという解釈ができる時も実はある。

一方butを用いた(12)(13)はどうか。Andとbutのちがいは、やはり接続詞butが「逆接」(Schwenter 2000: 259)の意味を言語的に明示的に標す(しるす)ことである。(12)(13)がbutを用いた例文だが、butが用いられていることで聞き手(読み手)が「逆接」の解釈(読み)を言わば強制的にしなければならない点がandを用いた場合とのちがいである。間接的にも伝わる「対照」と「逆接」とのちがいは、言語学的「逆接」では((12)を例にとれば)、話者がbutを用いることで「Maryは背が低いが、バレーボールがうまい」という発話内の「異なる視点間の衝突」を明示的に標し、「背の低さ」と「バレーボールのうまさ」の間の矛盾を明確に提案(主張)するところである(Schwenter 2000: 260)。Traugott (ibid.: 8)によれば、「逆接」は「複数の視点に基づく、言語的に記号化された対照」である。

対話形式(dialoguality)、二者の視点(dialogicity)の話に戻ろう。Traugott (2007)は、対話の中で話者が意図的に(strategically)用いていた用法が、次第に言語システムの中で新しい構造として定着

5) Schwenter (2000: 259)の原文は、It [adversativity] involves “[c]ontrast between different points of view as these are constructed in language use” (Schwenter 1999:127)である。

(conventionalize) することがあると提案する。例えば、対話の中で話順交替 (turn-taking) を伴って行う「質問－返答」の形が条件節の誕生に寄与したという考え方がある。

(14) 1 A: Is he coming?

2 B: (Yes.)

3 A: Well then, I'll stay. (Haiman 1978 より)

(14) は話順交替を含む対話形式だが、話順交替が言語変化を生むことは以前から指摘されていたという。Haiman (1978 : 571) は、Jespersen (1965: 374) の「質問＋含意された肯定的返答」から条件節が生まれたという提案をもとに、(14) のようなやり取りがその後の話の基盤として働くのだと説明した。Haiman (ibid.) の説明にさらに考察を加えるならば、(14) 1-2 の A, B の質問－返答はエスノメソドロジーで言われる隣接応答ペア (adjacency pair; Schegloff and Sacks 1973) であり、さらに好まれる応答形式 (preference organization; Levinson 1983: 332-339) の概念に照らせば、B の含意された肯定的返答 (Yes.) は、無標の (より単純な) 談話の構成を導く好まれる形式 (preferred second part) である。このことから、質問－肯定的返答が結びついた形が、条件節の源であったとの理論的説明がつくようである。⁶⁾

英語の条件節のような複合節 (complex clause) の発達ではないが、これと同様に、話順交替を含む対話形式から生まれた新たな構造に、フランス語の “la raison?/la cause? (the reason?/ the cause?)” という質問形の表現があるという。Rossari and Cojocariu (2007) による歴史的研究によれば、もともと対話の中で、話順 (turn) の冒頭で用いられていたこの

6) この条件節の誕生に関する議論は、まだ検証を要すると Traugott (2007:4) では述べられている。

表現が、説明や詳細を述べ始める時の（一般的）定型句になっていったという。この他にも、命令文であった *Guarda!*（イタリア語）、*look!*, *see*（英語）などは、対話というコンテキストを離れて談話標識として一般化していったという（Traugott 2007）。Traugott (ibid.: 8) では、こうした話順交替・対話といったコンテキストを鑑みた上で、「[語の歴史的意味変遷においては] 二者の視点の (dialogic) コンテキストが、新たに意味化 (semanticize) ⁷⁾ することがある」と提案する。二者による対話という「話の運営のしかた」、また二者による視点という視点のあり方に、新しい意味の源を求める考え方である。本稿で見てきた接続詞 *but* の発達がこれにあたるとし、古英語 *butan* (on the outside) から *but* への発達は、「一人の（また、より中立的な）視点」から、「二者の視点」による「逆接的」意味 (adversative meaning) への変化であるとする（Traugott ibid.）。

このように、*but* の意味そして意味の起源を探ろうとする時、「視点の数」のみならず、「話者の数」そして話者が携わっていたやりとりのジャンルをも考察に含めることが有効であろう。

5. 現代英語会話の中の *but* の分析と「対照の意味」の動機付けについて

最後に、現代英語の会話で用いられた *but* を分析し、特により新しい意味と考えられる「対照の意味」の動機付けについて考えてみたい。

新しく出現した意味の動機付けについては、意味変遷研究を行ってきた Traugott の最近の考察の中に考え方が示されている（2007, Section 5）：“What have been called “motivations” are for the most part conditions enabling change.”（動機付けと呼ばれてきたものは、多くの場合、変化を可能にする条件のことである）。Traugott (ibid.) は、日本語の「だ」系接続語（でも、だけど、だから、だって、だが、でなければ等）

7) 「意味化」(semanticize) という日本語の用語は秋元・保坂（2005）による。

(Onodera 2004: 119) が発話頭の接続詞として現れるようになったプロセスの一つの強力なきっかけが話順交代 (turn-taking) であると指摘した。(15) は「でも」という言語形式が文頭 (発話頭) に現れるようになったと思われる 18 世紀の日本語資料からの抜粋である (Onodera 2004: 94. Traugott 2007: Section 5 で引用)。

(15)⁸⁾ (Nyoooboo が Chuubei にふとんを差し出す。)

Chuubei a. Futon wa irumei.

Comforter TP necessary not

< 'Comforter won't be needed.' >

Nyoooboo b. *Demo* konya wa samuu gozariyasu kara,

But tonight TP cold COP because

< 'But, it's cold tonight, so...' >

(1784 *Futsukayoi oosakazuki*, Traugott 2007: Section 5 より)

(15) b. の「でも」は 4.2. の分析に倣えば、dialogual + dialogic (対話形式+二者の視点) 用法である。語頭に pro-predicate として働くコピュラ *d* を持つ多くの「だ」系接続語が発話頭・文頭で用いられるようになった現象について、Traugott (ibid.) は構造的動機付け (structural motivation) が働いたとしている。「でも」や「だけど」が発話頭の談話標識として現れるようになった動機付けとしては、主観化・間主観化もあげられるだろうから、この歴史的変化の動機付けは複数あると提案できるだろう。Traugott (ibid.) は事実、可能な限りの動機付けを探してみるべきだと提案している。ここで、現代日本語会話で用いられる「でも」「だけど」の機能が、現代英語会話で用いられる *but* の機能と重複す

8) 日本語逐語訳における省略記号は：TP (話題マーカー「は」)、COP (コピュラ)。

る (Onodera 2004: Chapter 3) というのも興味深い事実である。

現代英語会話の中での *but* の振る舞いはどうか。(16) は、4 名が参加する会話からの抜粋だが、この会話はだれもが発言権を取ろうとする、かなり熱を帯びた議論となっていた。

16⁹⁾

- ⋮
- 1 Christina: I don't think so.
- 2 Ben: └─ Some people think it's everyday,
- 3 *but* ┌─ some, some of us who live here tend to take it
- 4 for granted.
- 5 John: └─ I mean.
- 6 Noriko: ┌─ Um hmm.
- 7 Ben: ┌─ *But* a lot of people come from all over the world,
- 8 the whole over the parts of the.. United States to
- 9 see this. We who live in this area tend not to go,
- 10 we just take it for granted/there's a lot of things./
- 11 John: That's true.
- 12 Christina: Well.., well the reason that the native
- 13 Washingtonians don't go is because we know what
- 14 the traffic is going to be.
- 15 Ben: That's true. [laughter]
- 16 Noriko: Um hmm.
- 17 Christina: *But..but* we will still tune in the TV from 9:30 and
- 18 sit there.
- ⋮

9) トランスクリプト中の主な記号は次のとおりである。

´: 第一強勢, ____: 強調して言われた語, [: 2 人の話者の発話の重複, Z : つながれた 2 つの発話の間髪入れずに続けて起きたこと, / 語 / : 不確定な文字化。

3の *but* は、4.2.の分析に倣えば monologual + dialogic (対照) と分析できる。前節と後節を結ぶ等位接続詞の機能を果たす節頭 (clause-initial) の *but* である。

7の *But* は dialogual¹⁰⁾ + dialogic (対照) と言えるだろう。この会話では、複数の話者が談話の意味を交渉しながら、協同で会話を作り上げている様子が見られる。話者が一人ずつ交代で発言権を取るというより、複数の人が協同で発話を完成させるような「協同展開型発言権 (collaboratively developed floor; Edelsky 1981) が見られている。Ben の言っていることを分析してみると、Ben が自分の発話 2-4 のつづきとして、7の *But* を発しているとも、協同展開型発言権で進められる会話の中で新しい話順7を取ったと見ることもできる。どちらにしても、この *But* は対話的 (dialogual/multilogual) と判断できよう。この時7の *But* は話者が (自分が発言したい時に用いる) 「発言権を主張する」談話標識であろう。こうした行為 (action) をつなぐ談話標識である一方で、自分が言ったこと (2-4, ワシントン市民の政治に対する冷静な態度) と 7-10 で述べること (ワシントン市以外のアメリカ国民の、政治的場面に対する熱心な態度) をつなぎ、指示レベルの対照を表す接続語の役割も果たしている。

17の *But* (反復している) も Christina の 12-14 の発話のつづきとして発したと見れば monologual、複数話者の会話の中で新たな話順を取ったと見れば対話的 *but* と分析できる。

上の3つの *but* の振る舞いについてまとめてみよう。3の *but* は、節と節を結ぶ節頭 (clause-initial) の *but* である。7と17の *but* は、話順交代が起きる瞬間に用いられた発話頭 (書きことばでいえば文頭) の *but* である。どの *but* も対照の意味を表している。やはり、対照の意味を表す

10) 正確には、2人以上の参加者の会話であるので、multi-logual とでも言うべきであろう。

but が出現する環境としては、対話（会話）の中で話順交代をとまなつて現れる割合が多いと観察できそうである。¹¹⁾

談話標識の定義は複数ある中、Schiffrin (1987: 31) によれば「話の、ある単位を括弧でくくる前後関係に依存した要素」(“sequentially dependent elements which bracket units of talk”)である。もともと Goffman (1974) の「括弧」という概念は、始めの括弧 (opening bracket) が閉じる括弧 (closing bracket) より重要だとされ、そのため、言語形式が談話標識と判断される一つの基準は「発話頭に現れること」(Onodera 2004: 18) である。*But* は発話頭に現れることが発話末尾に現れるよりずっと多いことから、対照の意味を持つ談話標識 *but* の出現の動機付けとしても、「話順交代」そして「対話という形式」「二者による視点」が関与しているという仮説が立てられそうである。

6. まとめ

5.の現代語会話における *but* は、談話と談話を結ぶ発話頭の *but* であっても、節と節を結ぶ節頭の *but* であっても、視点は二つ (dialogic)、つまり対照の意味を表していた。もともと一人の視点の意味を有していた古英語 *butan* (on the outside) から、二人の視点からの対照の意味を持つ *but* への意味変遷を考えた時¹²⁾、「対話」というコンテキストの中で、話者が主観的・意図的なストラテジーとして *but* を「対照」の意味合いで使い始めたのではないかという仮説が成り立つだろう。

本稿の冒頭で、*but* の対照の意味が意味論の意味なのか、語用論の意味なのかという問題を投げかけた。3.の考察では、これまでの語用論的意味・意味論の意味のどちらかという問いに対しては、語用論の意味で

11) 今後、さらに詳しいデータ観察・検証が必要である。

12) 古英語から現代英語の間の *but* の詳しい意味変遷については、今後の調査・データ分析が必要である。

13) 「慣習化」(conventionalization) という日本語の用語は秋元・保坂 (2005) による。

あるという答えがいったんは出た。しかし、4.2, 5.で見たように、「相互作用の中で話者が言語形式をストラテジー的に用いる時、そうした用法が意味化することがある」(Traugott 2007)という考え方に基づけば、*but* の対照の意味についても、もともと語用論的推論として発生した新しい意味が次第に意味化し、*but* の意味論的意味になったということが新たに提案できることとなる。

謝辞

本論文の内容の一部を、青山英語学研究会 (Aoyama Lunchtime Linguistics) 月例会 (2008 年 7 月 23 日) において発表した際、貴重など意見を頂戴した秋元實治先生、中澤和夫先生に御礼申し上げます。また、草稿の段階でコメントを賜った堀江薫先生、大石悦子先生に御礼を申し上げます。

参考文献

- 秋元実治・保坂道雄(編).2005.『文法化：新たな展開』東京：英潮社.
- Benveniste, Émile. 1971 [1958]. Subjectivity in language. In *Problems in general linguistics*, Émile Benveniste, trans. Mary Elizabeth Meek (Miami Linguistics Series 8). Coral Gables, FL: University of Miami Press, 223-230.
- Blakemore, Diane. 1987. *Semantic constraints on relevance*. New York: Basil Blackwell.
- Brinton, Laurel J. 1996. *Pragmatic markers in English: Grammaticalization and discourse functions*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Edelsky, Carole. 1981. Who's got the floor? *Language in society* 10: 383-421.
- Fauconnier, Giles and Mark Turner. 2002. *The way we think: Conceptual blending and the mind's hidden complexities*. New York: Basic books.
- Goffman, Erving. 1974. *Frame analysis*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Grice, Paul. 1975. Logic and conversation. In *Speech acts (Syntax and semantics. Vol.3)*, P. Cole and J.L. Morgan (eds.). New York: Academic Press, 41-58.
- Haiman, John. 1978. Conditionals are topics. *Language* 54: 564-589.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto. 1965 [1940]. *A modern English grammar on historical principles, part V, syntax*. London: Allen and Unwin.
- 笈 壽雄(監修). 2003.『小説の文体』東京：研究社 (原著 Leech, Geoffrey N. and Michael H. Short. 1981. *Style in fiction: A linguistic introduction to English fictional prose*.)
- Kempson, Ruth M. 1975. *Presupposition and the delimitation of semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, Robin. 1971. If's, and's, and but's about conjunction. In *Studies in linguistic semantics*, C.J. Fillmore and D.T. Langendoen (eds.). New York: Holt, Rinehart and Winston, 114-149.
- Leech, Geoffrey N. and Michael H. Short. 1981. *Style in fiction: A linguistic introduction to English fictional prose*. New York: Longman.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, John. 1982. Deixis and subjectivity: *Loquor, ergo sum?* In *Speech, place, and action: Studies in deixis and related topics*, Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds.). New York: Wiley, 101-124.
- 文部省. 1997.『学術用語集 言語学編』日本学術振興会.
- Nölke, Henning. 2006. The semantics of polyphony (and the pragmatics of realization). *Acta linguistica hafiensia* 38: 137-160.
- Onodera, Noriko O. 2004. *Japanese discourse markers: Synchronic and diachronic discourse analysis*. (Pragmatics & Beyond New Series 132). Amsterdam: John Benjamins.
- Rissanen, Matti. 1986. Variation and the study of English historical syntax. In *Diversity and*

- diachrony*, David Sankoff (ed.). Amsterdam: John Benjamins, 97-109.
- Rossari, Corinne and Corina Cojocariu. 2007. Constructions of the type *la cause / la raison / le prevue + utterance*: Grammaticalization, pragmaticalization or something else. MS.
- Roulet, Eddy. 1984. Speech acts, discourse structure, and pragmatic connectives. *Journal of pragmatics* 8: 31-47.
- 澤田治美. 1993. 『視点と主観性：日英語助動詞の分析』東京：ひつじ書房.
- Schegloff, Emanuel A. and Harvey Sacks. 1973. Opening up closings. *Semiotica* 7.4: 289-327.
- Schiffrin, Deborah. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schwenter, Scott A. 1999. *The pragmatics of conditional marking: Implicature, scalarity, and exclusivity*. (Outstanding dissertations in linguistics) New York: Garland.
- 2000. Viewpoints and polysemy: Linking adversative and causal meanings of discourse markers. In *Cause-condition-concession-contrast: Cognitive and discourse perspectives*, E. Couper-Kuhlen and Bernd Kortmann (eds.). New York: Mouton de Gruyter, 257-281.
- Stubbs, Michael. 1983. *Discourse analysis: The sociolinguistic analysis of natural language*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 寺澤芳雄 (編). 2002. 『英語学要語辞典』東京：研究社.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1986. On the origins of “and” and “but” connectives in English. *Studies in language* 10-1: 137-150.
- 1989. On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change. *Language* 65: 31-55.
- 2003. From subjectification to intersubjectification. In: *Motives for Language Change*, Raymond Hickey (ed.). Cambridge: Cambridge University Press, 124-139.
- 2007. Seminar II. Dialogual and dialogic motivations in grammaticalization. Given at the Japanese Cognitive Linguistics Association (JCLA) 8th Annual Meeting (September 21, Seikei University, Tokyo).
- van Dijk, Teun A. 1979. Pragmatic connectives. *Journal of pragmatics* 3: 447-456.